

宮脇綾子《はりえ日記》について②

—第4巻から第6巻まで—

西崎紀衣

本稿では『豊田市美術館紀要』No.10(2018年)に引き続き、創作アプリケ作家・宮脇綾子(1905-1995年)の《はりえ日記》(1972-90年、70冊)の第4巻から第6巻までの記載を起こしたものと、各該当頁の画像とを併せて掲載する。

約20年の間ほぼ毎日綴られ、貼り続けられた《はりえ日記》は、宮脇綾子のライフワークともいえる作品である。豊田市美術館では、2017年度の博物館実習の一環として《はりえ日記》の第1巻から第6巻までを文字に起こす作業を行った。6名の実習生*がそれぞれ1巻ずつを担当し、作家と作品および取り扱い方を事前の授業で学び、筆者を含む学芸員立会いの下、作業にあたった。記載がくずし字であり、学生たちには不慣れな旧仮名遣いや旧字体、異字体が含まれるため、1冊全てを起こし終えることは目標とせず、定められた時間内で行いうる範囲とした。本稿掲載の日記各巻は、学生が文字に起こした資料を校正し、学生が着手にいたらなかった後半については筆者が作業を行い、作業の終了後に、作家ご遺族に内容を確認いただいた。ご遺族との連絡、補足説明の聞き取りや記載内容の修正等は成瀬美幸が行った。

本稿で掲載する日記は下記の通りである。

はりえ日記 4巻:1973(昭和48)年 7月13日— 9月 4日、45頁

はりえ日記 5巻:1973(昭和48)年 9月 5日—10月20日、43頁

はりえ日記 6巻:1973(昭和48)年10月20日—12月 2日、43頁

《はりえ日記》第1巻から第3巻までの書き起こしについては、『豊田市美術館紀要』No.10(2018年)を参照されたい。

昨年度に引き続き、宮脇実保子氏、山川由美氏、嶋地奈美氏には多大なるご厚情を賜りました。あらためて心よりお礼申し上げます。

※2017年度豊田市美術館博物館実習生：井関千絵、岡本亜季、谷崎壮太郎、長坂有紗、長田詩織、山際妙子(五十音順)

凡例

- ・本文中の旧仮名遣い、旧字体、異字体、踊り字は原則として原文のままとした。
- ・本文中のカッコ等の記号は、原則として原文のままとした。
- ・レイアウト上の細かな改行は1行にまとめた。
- ・文章末の日付やサインは、行の下揃えとした。
- ・人名については註釈で解説しているが、一部調査が行き届かなかったものがある。

第四卷

中表紙

愚いつくまみに (四)

四十八年七月十三日 より

九月四日 まで

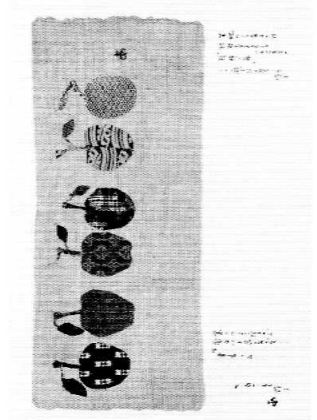
四巻 一一三頁 (図1)

生地にしてあるのは
杉村春子'さんから
いただいたもの
「朝鮮の麻」
この麻で私の帯を
作る

葉のついて居るのが
面白と思ったので—
『すもも』

七月十三日 作る
あ

図1 四巻 一一三頁



四巻 四一五頁 (図2)

富士通さんから買った
北海道産×ロシ

七月二十日

図2 四巻 四一五頁

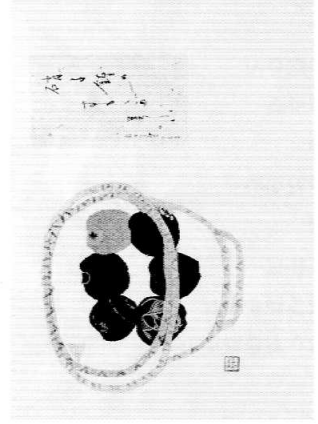


四巻 六十七頁 (図3)

硝子鉢の
すもゝが
美しい

八月二十三日 つくる

図3 四巻 六十七頁



四巻 八十九頁 (図4)

『こと』

この紙 中津川『長多喜』の主人より貰う
茶を入れる袋と色濃きところ苺
一かかえ位の大きな袋五つ位を『とうぞ』と
さし出された時の嬉しかったこと
十年以上前のこと

バックの紙 岐阜縣恵那坂下町³の紙

四巻 一〇二頁 (図5)

一本の線

(古い作品)
七月三日
ここに貼る

図4 四巻 八十九頁

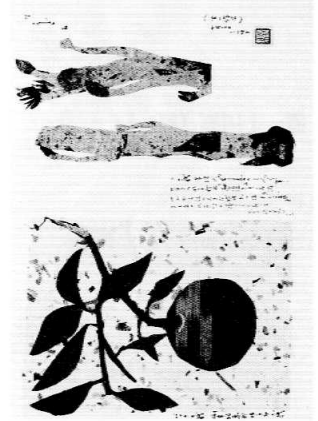
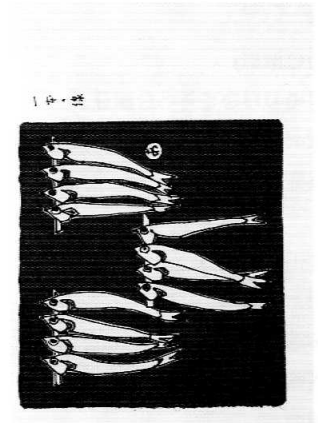


図5 四巻 一〇二頁



四巻 二二三頁 (図6)

私が鉄を持つと
干柿を切るか
魚を切る
どうしてだらう
長い間に
知らない中に
くせ見たいなものに
なつて終つたのだらう

この二枚古い作品
筆習の中から出て来たもの

四巻 一四一五頁 (図7)

思いがけない布が
おもいがけなく生きる
美しさ

四巻 一六一七頁 (図8)

『三ヶ日の蜜柑』
額に入れるとこのバックの藍の
両耳が見えない 耳を見ると手織りが
機械織か判る

昨年十月三十一日
静岡県三ヶ日町
稚月浜名園にて
東海放送番組
懇話会あり

七月二十六日
ここに貼る

四八七三三つくる

図6 四巻 二二三頁

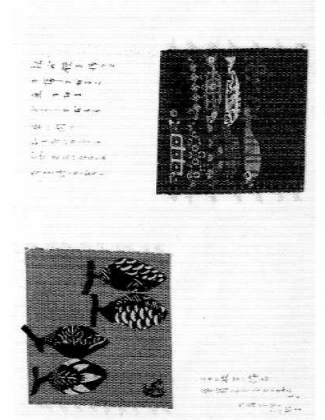


図7 四巻 一四一五頁

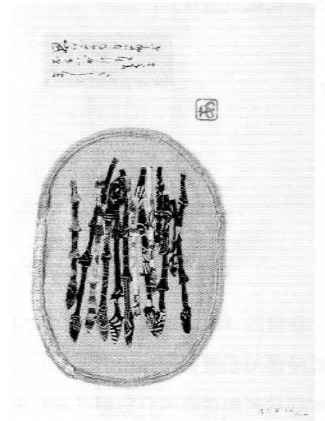


図8 四巻 一六一七頁



みかんがりの
 時 宿の主人から
 葉のついたのを
 貰う
 みかん園では
 いくら食べても
 よいが、外に
 持ち出すことは
 禁じられて居るので
 宿の主人に
 モデルにしたいからと
 言ったら
 下さった。

四巻 一八一—一九頁 (図9)

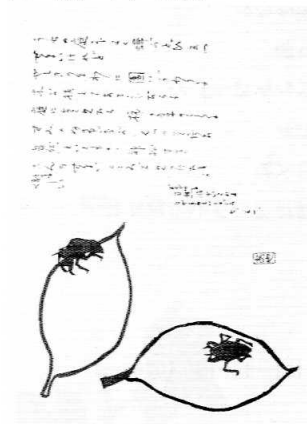
うちの庭からよく蝉がとび立つ
 せまいけれど
 やしきのまわりに圍いがわりに
 木が植えてあるからだらう
 庭に出て見たら柿の葉のうらに
 せみのめけがらがくっついて居た
 自然というものゝ神秘さを
 こんなせまいところで見つけた事が
 とても嬉しい

とんとん自然を破かいされる
 なげかわしいこのふる
 七. 三二.

四巻 二〇—二二頁 (図一〇)

『のうぜんかづら』
 うちの庭に この樹がある
 この家を建てた頃
 (今から三十年位前)
 人さしゆび位のつる草だったのが

図9 四巻 一八一—一九頁



図一〇 四巻 二〇—二二頁

